



旧白浜町「めがね橋」は地元民の寄付金で完成

館山市街から山あいを縫って白浜町へと抜ける県道、山裾を海岸線に沿って走る国道、さらに渓谷を刻みながら蛇行して流れる長尾川、それらが出会うまさに交通の要衝にめがね橋は架けられています。

『長尾村誌』には、めがね橋の建設以前、人びとは長尾川のこの地点を徒歩で渡っていたと記されています。確かに、めがね橋の架かる地点は、上下流に比べて川幅が広がり、流れの穏やかな浅瀬となっています。

大雨が降れば水嵩が増して徒歩できなくなる長尾川に、地域住民の念願であっためがね橋が建設されたのは、**明治21年（1888年）3月**のことです。**工事費の399円40銭（当時）が地域住民の寄付により賄われた**ことから、建設がいかに待ち望まれていたかをうかがい知ることができます。



当時のままの姿を残すめがね橋

丈夫なめがね橋

丈夫なめがね橋は、大正6年（1917年）の長尾川大洪水や大正12年（1923年）の関東大震災にも耐え、第二次世界大戦中には戦車が通ってもビクともしなかったと言われています。

建設当初、めがね橋は長尾橋と呼ばれていました。その歴史を物語るように東岸上流の袖柱の胴石には、「ながをばし」と刻銘されています。昭和34年3月、下流に鉄筋コンクリート造の新しい長尾橋が建設され、旧長尾橋には愛称のめがね橋がそのまま橋名として使われることとなりました。

なお、現在、めがね橋における自動車等の通行は禁止されています。

めがね橋の特徴

めがね橋は、地元の石工と大工のコラボレーションにより建設されました。石工と大工は、角切りにした大根を石材に見立てて模型をつくるなど、試行錯誤を繰り返しながら、精巧な石組みを見出したという逸話も伝えられています。

めがね橋の3連アーチは同寸法の欠円アーチで、迫石は台形断面石の布積です。両端のアーチ脚部は袖石垣により保護され、**中央2橋脚の上流側には水切りが設置**されています。橋壁面および袖石垣は、切石の布積により組まれており、主な石材は、塩風にも強い岩であろうということで、白浜町の海岸端にある「みずるめ」と呼ばれる石切場（現在は採石されていない）で採石された「みずるめ石」を使用しています。

両岸の橋詰には、笠石を載せた4本の立派な親柱が設置され、さらにその側には袖柱も4本設置されています。



上流側の橋脚に設置された水切り
出典：土木学会誌（2006年2月号）

基本情報

名称：長尾の「めがね橋」
竣工年：明治21年（1888年）
所在地：二級河川長尾川 南房総市（白浜町）滝口地先
アクセス：JR内房線館山駅から日東バス白浜行き乗車「長尾橋」下車 徒歩1分
土木学会選奨土木遺産（平成17年度認定）
参考文献：土木学会 選奨土木遺産 めがね橋 解説シート

現在のアーチ橋

現在のアーチ橋は、材料が石から鋼やコンクリートに変わったものの、今日でも建設される構造形式です。

手賀大橋は近年建設された、千葉県内におけるアーチ橋のひとつであり、柏市箕輪新田と我孫子市若松を結ぶ、延長415メートルの11径間連続上陸式鋼アーチ橋です。平成9年8月に旧手賀大橋に代わる新手賀大橋が暫定2車線で完成し、平成13年に4車線化されました。

橋のデザインは水鳥の羽ばたきをイメージして設計されたものです。



現在の千葉県におけるアーチ橋の例（手賀大橋）
提供：我孫子市